

危機の時代の 精神医療

変革の
思想と実践

高木俊介
Shunsuke Takagi

日本評論社

あとがき

おお、やつらは、どいつも、こいつも、まよなかの街よりくらい、やつらをのせたこの氷塊が、たちまち、さけびもなくわれ、深潭のうへをしづかに江りはじめのを、すこしも気づかずにゐた。

金子光晴『おつとせい』より

すこしも気づかずにいる。時代の危機を。社会の危機を。人間の危機を。人々は、よるべない不安を権威と国家にすがりついてやりすごし、自分たちと違う者を、自分らに反対する者を、この危機に気づき警鐘を鳴らそうとする者を、異端として排除する。

愚かな大衆、という話ではない。『大衆の叛逆』というオルテガの前世紀はじめの著作は、大衆社会の愚かさを描いた書物のように誤解されている。しかし、オルテガがほんとうに言い

たかったことは、知識人、科学者、専門家、そしてそれらを組織して理性的な国家運営を行うべき政治家、官僚たちが、精神の貴族性を放擲して衆愚と化してしまったという、二〇世紀初頭の世界への批判である。オルテガの批判は、世紀を越えて、戦争と全体主義が回帰するこの新しい時代にこそふさわしい。

コロナ・パンデミックは、世界中で、専門家を自称・他称する者たちが、それぞれに自分たちの専門性こそが正しいと、その正しさの検証を専門家間で行うことなく、大衆に直接に主張しあっている。ある者は専門の狭い窓からすべてを理解していると大衆を脅して言いなりにさせ、ある者は自ら理解していないことを理解しないまま「啓蒙」に奔走し、ある者は自らの見解を隠し通して大勢にまぎれて過ごしている。専門家集団が麻痺し機能しなくなっているのだ。私たちは、同じことを、一〇年前、原発事故で経験してきたはずだ。

広大無辺な自然の一部を切り取り、実験室に持ち込んで「自然を苛む」(F・ペーコン)ようにして得る「真理」によって、世界は理解できる。このような近代自然科学の思想と実践は、中世の魔術的世界の中から近代を沸騰させ、現代社会に人類未曾有の発展をもたらした。だが、もともと自然の一部から搾り取った科学的「真理」をいくら寄せ集めても、社会と人間の全体は再構成できない。

科学の驚異的な進歩発展によって、私たちの社会は制御できないまでに膨んだ。科学と技術

の結合が可能にした現代のグローバリゼーションは、その時間と空間の極度の短縮によって、みずからの母胎である科学自体の視界をはるかに越えるところまで行ってしまった。原子力の解放はそのさきがけであった。原子力も、気象も、経済も、そして現代科学の粋を集めた戦争も、そして今、パンデミックとその影響を被った世界経済も、通常科学では把握できない規模と複雑性、偶然性をもっている。

それらにもまして、人間の精神こそは、脳の生物学的機能に還元しようとすればするほど、それをはみだすものをそのつど生み出してしまふ、複雑性に満ちた〈巨大な微小世界〉である。医学は、通常科学だけによつては理解しえないそのような現実の上に成り立っている。精神医学は、なおさらである。さらに、医療は、人間それぞれの実存的生と、その複雑な関係性からなる社会という、医学という知に包み込み得ないところにある実践だ。

現代という時代の危機は、自らの膨張によって暴走する社会を制御する思想と実践を、この社会がいまだに持っていないことである。私たちは、全体を見透すには微力すぎる科学に縛られ、私たちの社会はそれに歪められている。それに抵抗しながら切り拓いていくべき思想と実践は、私たちが現に生きている複雑性と関係性、そして偶然性に対して開かれたものとなるはずだ。

今回も本の装幀は、世界の現代アートの先端で活躍する井上廣子さんをお願いした。彼女の



ISBN978-4-535-98525-4

C3047 ¥2200E



定価(本体2200円+税)

1923047022004



作品は、危機の時代の深淵に手をつき、そこから未来へ反跳する。

京都新聞福祉コラム『暖流』には、震災直後からもう一〇年、市井の人々に対して折々の私の意見を発する場をいただいている。さらに、自由な発言の場を与えてくれている『統合失調症のひろば』、専門誌であるにもかかわらず大風呂敷を広げることを許してくれる『精神療法』誌など、多くの媒体に感謝。

そして、この本に「刊行に寄せて」を書いてくれた畏友・横田 泉、彼の文章のおかげで、あまり語らずにきた私の臨床現場の一端を理解してもらえないのではないか。彼と同じ時代を共有して生きてきたことを、ありがたいと思う。

本書で差し出すことができたのは、批判に終わりがちな未熟な思想と、今の精神医療をとりまく現実の中では十分になしえず、これまでと同じ過ちも抱えたままの実践にすぎない。だが、思想は緻密に、批判的に、実践は大らかに、楽天的に、それが今の私の到達点である。

二〇二二年八月十五日

高木俊介